
ドラえもんに会いたくて

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラえもんに会いたくて

【Nコード】

N9250F

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

就職活動をしているものの、どうにもうまくいかない「あたし」。部屋でたばこを吸ってウダウダとやっているときに起きた、妙な出来事。……なお、「ドラえもん」の熱心なファンの方は、このテキスト本文を見ずに即バックした方がいいと思います（警告）。

2011・9・8「小説家になろう」運営の要請により、二次創作に移行。

（前書き）

一応もう一度警告

漫画作品「ドラえもん」の熱心なファンの方はこれ以降の文章を読んじゃダメですよ。読まれて気分を害したとしても責任持ちませんよ。

……あと。矢車は「新・ドラえもんのび太の宇宙開拓史」を応援しております。個人的にですけど。

ネズミ色の事務机に足を乗つけてふんぞり返り、たばこを燻らせた。たばこの煙はあたしの目を少ししばたせたあと、六畳間の部屋の空気に溶けていく。その様子を、まるで白線流しを見送る殊勝な高校生のように見送る。ジジジ、とたばこが音を立てた。

はたと気づいて、灰皿に手を伸ばす。いつも使っている傘型の灰皿にトントン、と灰を落とす。灰は雪のようだ。音はないのに気配だけ残してポトンと落ちる。そして灰を落としたあとに、またたばこを唇にあてがった。一瞬口の中に苦い香りが広がった。

ちよつと嫌気がさして、灰皿にたばこを押しつけた。まるで鳥の巣のようになってる灰皿に、新たなシケモクが加わった。

「あゝあ」

あたしは部屋を見渡した。

でも、あたしの部屋にはあたしの興味を引くようなものはなかった。むしろ、吐き気を誘うようなものしか置いていない事実になんかへこんだ。

箆笥の前に、似合いもしないリクルートスーツが掛かっていた。たばこの灰を落とすまいと注意していたのに、結局落としてしまってパンツに白いシミが出来ている。クリーニングに出したいのだけれど、そんなお金もない。だから、あたしのリクルートスーツは今着ているものが事実上の一張羅だ。

部屋の隅には、「あなたにも出来る！ 就職前線で勝つ！」と書いてある就職雑誌（あるのだ、そういうものが）とか、学校から寄せられた「就職対策必勝ブック」とかいう、どうしようもなくつまらなそうな本が一回も読まれずに山積みになっていた。

ああ、吐き気。

現在、あたしは就職活動中だ。

大学全入時代と揶揄されるこの時代に、中の中としか形容できな

いような風采の上がない大学にもぐり込み、そして来年の三月には卒業になる。大学院に行くわけでもないし、かといって親が資産家でもない家の子供なら、大抵は働くしかない。昔の女学生のように「家事見習い」とは行かない。そんなわけであたしも当然のように就職活動をしているのだけれど……。

スチール製のネズミ色の机の上には、エントリーシート（まあ、簡単に言えば企業への自己紹介文のようなものだ）とか、履歴書が山のように置かれている。何の気なしにそれらの紙類を手についた。エントリーシートの上には志望する会社への美辞麗句が踊っていて、履歴書の上にはあたしの学歴が嘘偽りなく書かれていた。見れば見るほど、吐き気とともにめまいさえ起こしそうな文章だった。

そんな文章に嫌気がさして、机の上にある小さなカレンダーを眺めた。今はもう五月の中頃だった。

現在の就職活動というのは、“青田刈り”と評されてしまうくらいにその開始時期が早い。気の早い人なら大学三年の秋ごろには就職活動が始まるし、どんなに気が長い人でも大学三年の冬には就職活動を始める。早い人なら大学三年の一月には内々定が貰えるし、要領のいい奴ならば四月までには内定を一個は貰える。要領が悪くても五月の連休までには一個くらいは内定をもらえるものだ。

でも、あたしは五月の連休が過ぎたというのに内定をまだ一個ももらっていない。

まあ、あたしの場合就職活動の開始時期が遅かった。平均すれば大学三年の二月には始まる就職活動を本来の不精のせいでするずると引き延ばし、四月に始めたというのも大きい。

でも、何より、あたしはそもそも要領が悪いのだ。笑顔をへらへら振りまいて志望動機や自己アピールを厚顔無恥に言えるような要領が備わっていればよかったのだけれど、どうしたわけかあたしにはその“要領”が一切備わっていなかった。そもそも、“自己アピールをお願いします”と言われて、“私の強みは……”と即答できる奴なんて、お友達どころか係わり合いにさえなりたくない。

そんな奴なので、まだ内定を一個ももらえていないわけなのだ。
今日も企業に行ってみたけれど、まるで手ごたえがなかった。……
ま、どの企業に行っても手ごたえなんてないんだけど。

はあ。

あたしは部屋で一人、ため息をついた。

ため息が部屋に溶け切った後、机の上に置かれているたばこの箱
を手に持って、一本取り出した。そして、懐から百円ライターを取
り出して火をつけようとした。

そのときだった。

両足を机の上にのせるなんてポーズをしていたせいで、不意に座
っていたネズミ色のイスがバランスを崩し、どつてーんと床に倒れ
てしまった。どうやら床に倒れるときに、机の上のいろいろなもの
を引っかけてしまったらしく、床に履歴書やエントリーシートが散
らばった。

あいたたた。

頭をさすって畳敷きの床から上体を起こす。そのとき、あること
に気づいた。

あたしの太ももに、つまりは一張羅のリクルートスーツのパ
ンツに、灰皿が逆さに乗っかっていた。ああ、これは……。ま
るでビスケットの型を外す要領で灰皿を取って見ると、あたしの太
ももの上でシケモクと灰が山のように乗っかっていた。

ちーん。

ああ、死んだ。

あたしはそう思った。

階下から響く、“何かあったの！？”という母さんの言葉に“何
でもない”と大声で応じ、太ももの前で山になっているたばこの灰
を払いのけた。注意したつもりだったのだけれど、たばこの灰は紺
色のリクルートスーツに白いシミを作ってしまった。

どうするのよ、もう、リクルートスーツないのに。

もう、何もする気が起きなかった。

リクルートスーツのない就職活動学生なんて、裸で戦場に出る足軽のようなものだ。笑われるだけならまだいいけど、（社会的に）殺されかねない。なら、クリーニングに出せよ、という意見もあるうかと思うけど、でもあたしにはお金がない。そもそも就職活動にはお金がかかるのだ。

通算何度目かのため息をついたあと、床に寝そべって、ふと視線を天井の輪型の蛍光灯に向けた。でも、すぐに飽きてしまつてその視線をふと本棚にやる。“本棚”とはいうものの、その中には活字の本が全く入っていない。入っているのは漫画ばかりだ。グダグダと長いばかりでどうしようもない恋愛漫画やら、あたしの趣味が爆発の怪奇漫画がずらつと並んでいる。

あたしの視線は漫画の背表紙に踊っていたけれど、不意にある背表紙で止まつた。

“ドラえもん”

ドラえもん。二十二世紀の未来からやってきた猫型ロボット。

あたしの視線は、“大長編ドラえもん「ドラえもんのび太の宇宙開拓史」”という背表紙で止まつた。

いつどこで買ったのか覚えていない。でも、この本棚が存在するところからずっとある。きつと、一番読み込んだに違いない漫画だ。寝そべりながらその背表紙を眺め、あたしは思わず呟いていた。

「ドラえもん、あたしのところに来ないなあ」

ドラえもん。二十二世紀からやってきて、うだつの上がない少年を助ける。ときには少年をしかり、時には少年と共に悩む。一人で悩むあたしにとって、ドラえもんはきつと今一番欲しいものだった。

もしも、どこでもドアがあれば。一番痛い、企業までの交通費がすべて浮く。

もしも、タイムふろしきがあれば。今あたしを絶望させているたばこの灰のシミも簡単に落ちる。

もしも、もしもボックスがあれば。就職のない世の中を作り出す

ことができる。

もしも、ドラえもんがいたら。きっと、企業に拒絶されたあたしに、優しいあの声で励ましてくれる。

でも、こんなの妄想だった。現実逃避気味な、あたしの妄想だった。

そんなあたし自身にも嫌気がさして、視線を天井に移してため息をつこうとしたその瞬間だった。

突然、部屋に変な音が響いた。
ガタガタガタ。

最初、地震かと思った。でも、それは違った。
ネズミ色の机が、なぜかガタガタと鳴っているのだ。

いや、正確には、机についている大棚がガタガタと鳴っている。
なんだなんだ？ あたしは好奇心よりもむしろ恐怖感でいっぱいだった。

どんどん、その音は大きくなってゆく。まるで、大きな恐竜が近づいてくるかのように。

そして、その音が臨界点を迎えたころ、突然机の大棚がひとりでお開いた。

その棚の中から、何やら青いものがずるずると這い出してきた。

シリコンとも金属とも、あるいはスポンジともつかない奇妙な素材。明らかにあたしの倍はあるんじゃないかというその容積。まるで雪だるまのような体型。存在が暑苦しい。そして、毒々しいまでに青いそのボディ。でも、所々赤や白のアクセントが入っていて、なんだか不気味だった。

その青いものは、嫌に耳に残るフィン音のようなものを立てて、あたしに近寄ってきた。とんでもない短足の足元を見ると、少し浮いていた。きつと、3mm浮いているのだろう。

そして、その青いものは私の前に立って、どら焼きを十個は食べられそうな、絶望的に大きな口を開いた。

「やあ」

その声は、最近ネット上で叩かれている例の声ではなくて、すごく聞き慣れたあの声だった。うんうん、やっぱりこうでなくっちゃなあ、とあたしは思った。

その青いものは、続けた。

「はじめまして、僕ドラ……」

その言葉を聞いている瞬間のあたしの脳裏を掠めたのは、ダメなメガネ小学生とその孫の孫の顔だった。

そのイメージが頭をかすめたその瞬間に、その青いものの言葉はぶちつと途切れた。

というのも。

あたしがその青いものに渾身の右ストレートを加えたからだ。そのパンチは、無意識のものだった。メキヤメキヤ！ どんがらガツシャーン！ そんな音とともに顔を歪ませる青いもの。確か設定によると百kg以上あるはずの体は、数m吹っ飛んで壁にぶつかる。

「ななな、なにをす……」

明らかに狼狽している青いものに、あたしは無意識に言い放った。「帰れ！！」

ででで、でも……と食い下がる青いものに、あたしは右手を振りかぶって、「帰れ！」のシュフレピコールを飛ばす。

さすがに命の危険があると察したのか、その青いものは開かれたままの机の大棚に逃げ込んだ。そして塹壕から敵の姿を窺うかのように、その大棚の中からあたしの様子を窺っている。その青いものに、例のいじめっ子もびつくりの怖い顔をしてやると、その青いものは何かに怯えるように頭をすぼめ、そして棚を内側から閉めた。あたしは駆け寄って、棚を開いた。でも、その中にはタイムマシンの気配などなく、普通に筆記用具が入っているただの棚だった。

あたしはその大棚を眺めながら、心の中で呟いた。

“ つか何あれ。気持ち悪う。何あの容積。何あの異様な存在感。つか、なにあの青いボディ。うわあ、実際に見るとあり得ねえ……。やっぱり、あの造形って二次元だからこそなんだなあ……。そ

れに、確かアイツって、祖先のダメさ加減に嫌気がさした子孫がよこした子守っていう設定なんだよな……”。

ようやく無意識にとはいえあの青いものを殴った理由に思い至ったあたしは、とりあえずお金をかき集めてリクルートスーツをクリーニングに出そうと心に決めたのだった。

（後書き）

就職活動中の皆様、頑張ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9250f/>

ドラえもんに会いたくて

2011年9月10日03時23分発行